

平成11年度研究報告・追補

専門研究

A01 「原典」

A01 『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法

研究代表者	五味 文彦 東京大学人文社会系研究科 教授
協力者	安田 次郎 お茶の水女子大学文教育学部 教授
分担者	近藤 成一 東京大学史料編纂所 助教授
分担者	今村みゑ子 東京工芸大学 助教授
分担者	田淵句美子 国立国文学資料館 助教授
分担者	桜井 陽子 熊本大学教育学部 助教授
分担者	本郷 和人 東京大学史料編纂所 助手
分担者	高橋慎一郎 東京大学史料編纂所 助手
分担者	尾上 陽介 東京大学史料編纂所 助手
分担者	菊地 大樹 東京大学史料編纂所 助手
分担者	井上 聡 東京大学史料編纂所 助手
分担者	高橋 典幸 東京大学史料編纂所 助手
分担者	小川 剛生 熊本大学文学部 助教授

本年度は『明月記』班と『吾妻鏡』班の研究組織をつくり、それぞれに研究会を開いて課題を設定し、そのうえで情報を交換しながら、相互の関係に焦点をあてて研究を進めてきた。『明月記』班は、全体の研究会を毎月一回実施して『明月記』の注釈と現代語訳の方法を吟味する作業を行い、テキストの作成、写本諸本の収集、藤原定家の著作の調査と収集、についてそれぞれに研究分担者に割り当てて作業を行い、定期的に報告会を開き、情報として蓄積してゆき、七月には天理図書館での原本調査を実施した。

そうした成果は『明月記研究』4号（続群書類従刊行会）に報告した。なお成果の一部は五味が原典班で報告し、尾上も研究集会で報告している。

また『吾妻鏡』班は、研究会を六月から月一回実施して、研究分担者と研究協力者に將軍のそれぞれの年代記の特質を把握する課題を設定するとともに、記事の誤謬を改めてゆく作業を行った。また

校訂本に基づくテキストの作成

写本諸本の収集

について、定期的に報告会を開き、情報として蓄積していった。吉川本『吾妻鏡』の収集その他において大きな成果をあげることができた。

A01 いわゆるティーム朝ルネッサンス時代におけるペルシア語・チャガタイ語文献の研究

研究代表者 久保 一之
京都大学大学院文学研究科 助教授

1. 今年度最初に研究対象としたのは、ティーム朝末期のヘラートで活躍したペルシア詩人サイフィーが詠んだ詩集『驚くべき者たちの諸技術』で、この作品は「シャフル・アーシューブ(またはシャフル・アンギーズ)」と呼ばれる特異なジャンルに属する。シャフル・アーシューブとは、特定の都市およびその住民に対する称賛や非難を詠んだ韻文作品のことで、ペルシア古典文学におけるシャフル・アーシューブの位置付けや変容、およびヘラートを対象とした上述サイフィーの作品を具体的に検討することによって、いわゆる「ティーム朝ルネッサンス」をもたらした都市社会の成熟や全般的文化水準の上昇を裏付けることができた。この研究成果の一部は、本特定領域研究調整班(原典班)の研究集会(平成11年11月13日京大会館)において口頭で発表した。その内容は、補訂の上、近々学会誌に発表する予定である。
2. 資料収集活動としては、平成11年12月20日から平成12年1月21日まで海外出張(トルコ、エジプト、シリア、イラン)を行なった。特に、トルコのスレイマニエ図書館とヌル・オスマニエ図書館、イランのテヘラン大学中

中央図書館と国会図書館に所蔵されるペルシア語写本については、かなり充実した調査を行なうことができた。研究課題に直接関わる成果としては、ティムール朝期の著名文人による書式集・書簡集(一般に「インシャー作品」と呼ばれる)の写本所在状況を明らかにすることができた。

また、イギリスの大英図書館とケンブリッジ大学図書館、およびフランスの国立図書館に所蔵される写本の内、本研究に不可欠と思われるものについては、京都大学付属図書館を通じてマイクロフィルムを入手し、紙に焼付けて利用し易い形にした。

A02 「本文批評と解釈」

A02 初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究

研究代表者 佐藤 研
立教大学コミュニティ福祉学部 教授

1999年度は、研究課題「初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究」の基本的作業計画をほぼ予定通り終えることが出来た。すなわち現在の標準的なギリシャ語福音書共観表の K. Aland, *Synopsis quattuor evangeliorum* をもとに、共観福音書間の共通の語句をまず紙面上に蛍光ペンで彩色し、福音書相互の関係が視覚的に明らかになるようにした。更にはそれをもとに、コンピューター上に同様の共観表を作り、前の彩色作業の結果をコンピューターに移植する作業を行った。いまそれがほぼ完成している。現在のスタンダードなワープロでは、技術的にやや困難な面があったが、何とか使用に耐えるようなものが出来てくるように思っている。具体的に説明すれば、共観福音書のある段落において、三福音書に全く共通の語はブルーに、マルコとマタイにのみ共通なものはグリーンに、マルコとルカにのみ共通なものはピンクに、そしてマタイとルカにのみ共通なものはオレンジに文字の背景を彩色した。さらには語の活用のみが違い、語根が同じ場合は、それぞれにおいて(背景を彩色するのではなく)当該部分に下線を施した。これによって、最古の福音書が他の福音書によっていかに資料的に使用されたか、またいわゆる「Q文書」という、マタイとルカにのみ使われた幻の資料集が如何なるものであったかが、オブティカルに確認できるツールが出来たことになる。他方、福音書の新訳の改訂も終り、今度はギリシャ語版と並行して、日本語の共観表を作成・彩色する課題が残っている。

A04 「古典の世界像」

A04 中国における制度と古典 科挙制度と言語史・文学史の相関から

研究代表者 平田 昌司
京都大学文学研究科 教授

規範としての「中国語」がいかに形成され、それが歴代の制度の中にどのように具体的なすがたで現れてきたかの解明に重点をおいた。

- (1) 書記言語が口頭言語をいかに規制してきたかに関する研究をおこなった。主として六朝・唐の文献を対象とした調査により、北中国で8世紀前後に集中して発生した発音規範の変化が、記録者である識字層の世代交替・社会変動と関係した可能性を指摘、変化に対抗して伝統的発音規範を維持するための装置が、いわゆる「吏部銓試」であったとする見解を示した。
- (2) 性別による言語使用の規制が歴史的にどのような経過をとって変化してきたかにつき、後漢から1920年代までの女性の言語をめぐる規範意識の変遷を調査した。公の場での会話をおこなうこと、その手段として用いられる共通語「官話」から女性を排除するという原則にもかかわらず、官僚階層の娘たちは結婚にともなう移動を前提にかなり幅広い言語的教養をそなえることがあった事実を指摘した。
- (3) 科挙制度の中で絶対的規範であった古典文が20世紀にその地位を失い口語文が主流となる過程をめぐり、嚴復・呉汝綸ら清末開明派官僚の書簡・日記を中心とした調査をおこなった。これにより、日清戦争以後の伝統的言語規範・教養規範の解体過程が明らかにされつつある。
- (4) 2000年1月、科挙に関する重要な新著を公刊されたUCLAベンジャミン・エルマン(Benjamin Elman)教授を招聘して京都・東京で研究会を開催、中国語学・文学・歴史・思想など諸分野の研究者との討論を行い、科挙史の研究にとって言語史・文学史から寄与しうる問題が数多く存在することを示した。3月には、ちょうど来日中の徐丹教授(フランス国立東洋語学校)を京都に招き、言語規範の諸相をめぐる研究会を開催している。

A04 イスラームにおける伝承知と理性知

研究代表者 鎌田 繁
東京大学・東洋文化研究所 教授

分担者 濱田 正美
神戸大学文学部 教授

15世紀中葉以降のオスマン帝国の知識人は、彼らが抱懐した思想を古典オスマン語という極めて特殊な美文を以て表現した。従って、彼らの政治思想の展開を後付けるにも、先ずはその表現形式に通暁する必要がある。この前提の下に、濱田は、最初期の美文作品でありかつ君主とその政治についての多くの言及を含むトゥルスン・ベイの『征服王メフメト伝』について、解読を進めるとともに、テキスト原文をマッキントッシュのテキスト・ファイル化した。これによって美文構造を分析することが容易になると予想される。また、トゥルスンの一世紀後の代表的文人であり、美文表現の最高到達点を示すとともに、同時代の政治と社会に関して多くの発現を行っているグリボルル・ムスタファ・アーリーの諸作品、特に『諸情報の宝蔵』の未公刊部分の写本の所蔵状況に関する情報を収集した。新年度には、必要な場合には現地での調査も含め、これらのマイクロフィルムの手入に努力し、入手可能な部分からテキスト・ファイル化を行う予定である。(濱田 正美)

A04 イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像の研究

研究代表者 杉山 正明
京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 志茂 碩敏
財団法人東洋文庫研究部 研究員

イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像を研究する第一の作業として、入手済みのイラン・イスラーム文献古写本のマイクロ・フィルムの中から、とくに緊急性の高いものを選んで焼きつけ、解読をすすめた。その結果、モンゴル時代のイラン・イスラーム地域における世界認識は13・14世紀の当時として極めてすすんでおり、中国・中央アジア・中東・インド・ヨーロッパの各文明圏にまたがって文字どおりユーラシア・サイズで確実かつ具体性のある知見を有していたことが克明にわかってきた。また、これらの各文明圏の主要な国家や王朝の興亡についても「政権交代系統図」とでもいっていいビジュアル化した文献とそれにもとづく認識が、少なくとも支配層であるモンゴル王族・貴族とその政權

担当者たちには確実に存したことが判明した。一方、モンゴル時代の関連する多言語文献、なかでも膨大な情報量のある漢文文献についても、完全同時代の元代刊本による元代典籍文献のマイクロ・フィルムからの写真焼きつけをすすめた。その結果、現在までの時点において、中国史上でも画期となる世界認識のいちじるしい拡大・変化がモンゴル時代に生じていたこと、そしてそれはイラン・イスラーム文献の研究からえられる中東における世界認識とあきらかに連動しており、アジアの東西をつらぬいてかってない真の世界像の出現がモンゴル時代に訪れていたことがほぼ判明した。さらに、付帯研究としてモンゴル時代の世界像を直接に示す「世界地図」の撮影・焼きつけをすすめつつあるが、その詳細なデータ整理によりやく取りかかったところであり、次年度にそれらの整理・研究を行ないたい。

B01 「伝承と受容(世界)」

B01 初期ギリシア文学におけるゼウスの主権

研究代表者 安村 典子
金沢大学工学部 教授

本研究は、初期ギリシア文学における語りの手法を、ゼウスの主権獲得というテーマに焦点をあてて考察する試みである。

『ホメロス風讃歌』第三番の『アポローン讃歌』において「テュポーンの物語」は伝統的に、本筋から離れた挿入物語としてとり扱われてきた。しかし雌蛇の話、ヘラーの出産物語が、このテュポーン物語を中心とする「円環構造」をなしており、内容的にも本讃歌全体の中で、きわめて重要な部分を形成していることがわかった。テュポーンの養育者であったピュトーンを滅ぼすことによって、アポローンがゼウスの主権獲得にいかにか大きな役割を果たし得たかが明らかにされた。

『ホメロス風讃歌』第四番の『ヘルメース讃歌』においては、ヘルメース神の多岐にわたる権能が螺旋状に配置され、その語りの手法自体が、狡知にたけた早業の神ヘルメースを巧みに表現するものであることが解明された。また、ゼウスの主権を脅かす可能性のあったヘルメースとアポローンの対立に対して、ゼウスがいかにか巧みな裁定を下すことによって和解へと導いたかが考察された。

以上のように、初期ギリシア文学作品に見られる特異な「語りの手法」を細かく検討することにより、その部分の文学的価値、並びにその部分と作品全体との関わりが解明され、同時にゼウスの主権にたいする挑戦者とゼウスとのせめぎ合いも考察された。